

Bios Politikos と それ を 支 え る も の

高橋 正 和

Über das Bios Politikos und dessen Träger

Masakazu TAKAHASHI

「しかし、センスス・コムムニス¹⁾は、ある共同体的感覚 (gemeinschaftlicher Sinn) と、言いかえれば、ある判定能力の理念と解されなければならない²⁾。」

I・カント「判断力批判」

まえがき

古代ギリシアは、たしかに世界歴史上の一大偉観である。哲学や自然学、数学といった諸学の成立、アテネ民主制の確立、そして大理石で形どられた神殿や競技場の建築群と彫刻群の壮麗さ、地中海でのあまたの植民都市建設、ペルシア戦争からアレクサンダーの東方大遠征にみられる英雄達や多彩な人物の登場……。こういった歴史を回顧するだけで「世界史の奇跡」という言葉が発せられたとしても、それはあながち過褒とは言えぬ、時代の大きな画期をしるすものとして、大方の承認も得られる所であろう。

たとえばアクロポリスの丘の上にそびゆるパルテノン神殿の雄姿を一瞥するとき、いったいどのようにしてこのような達成がこの民族によってなされたのかという問いが誰の胸の中にも湧きあがってこよう。ギリシア人をして文字通り、

前代未聞の創造、革新、真にラディカルな突破を可能にしたのは果たして何であったのか。この問いは、古代ギリシアにおける文化的・社会的達成がその後のヨーロッパ世界の展開、ひいては現代世界の最深部にまで達する長大な射程を有するがゆえに、看過されるべきではない。というのも、実際のところ、「人類のヨーロッパ化」の進行は、古代ギリシアにおける幾つかの「原創設」(Ursprung)——哲学、個別科学、政治体制、ユークリッド幾何学等々の——の普及の地球的規模での拡大を伴っているからである。

右の問いに対する答えとして、さしあたり二つの事柄を指摘しておきたい。ひとつは、経験科学(医学、天文学など)の発達にみられる脱神話化の遂行、旧来の説明方式に依存しない批判的精神の芽生えが挙げられよう。つまり神話的思考からの脱却が思考の自律化を促して、各領域毎の学の形成へと向かっていったというように、その背景となった歴史的転回を見ることができよう。

もうひとつは幾何学に典型的にみられる論証、あるいは証明の要請ということである。古来、数学を語る者は必ず証明しなければならぬことになっているが、数学の周知のこのスタイルは、それ以前の他のどの地域にもその痕跡すら見出しがたいものとして、古代ギリシアをもって嚆矢とする。

ここにも人は、先の批判的精神の誕生と同様、思考上の一大革新が行なわれて

いるのを見届けることができよう。彼らはたとえ、対頂角が等しいとか、二等辺三角形の両底角が等しいことを、分度器で実測したりという経験的なしかたで確かめることに満足せず、幾何学的論証という全く新しい方法の導入によって答えようとしたのである。

ここにみられる論証的精神も、先の批判的精神も、どこまでも人間理性に基づくかんとする思考の自律という新しい精神的態度の誕生を告げるだけでなく、それが、反対意見をもつ他者に対してもいつもオープンに開かれていること、かつ万人をいわば強制的なしかたで納得させることのできる、ある種の普遍的な伝達力を具備している点にも注意を向けおきたい。

ところで、右のような思考の変革はその後のヨーロッパ中世や近代を生み出すことになった変革とは異なるものであろうが、しかし現代のわれわれにも支持されうるし、又現代世界にも尚依然として影響力をふるいつづけている。本小論でとりあげる政治という公共的性格をもつ世界の出現も、このような思想上の変革と無関係ではない。それどころか、反対にそれは右に述べた批判的―論証的精神を生み出したものと同じ根源から由来しているのである。

ではなぜそう言えるのか。いったい政治的な共同世界を支えるものは何であるのか。ギリシアにおける哲学や諸学の創設は、デモクラシーの成立とどうかかわってくるのか。そもそも批判的―論証的精神とは何であり、何がそのようなものを生み出したといえるのか。

以下の行論は、これらの問いに何らか答えんとする試みであり、同時に政治学と哲学とが交わるその交差地帯のスケッチである。今日、他の学問領域はもちろんのこと、哲学の営みもますます専門化し細分化していくなか、もともと哲学がもっていた他の諸学との豊かな関わりも見失われつつあるようにも思われる。政治が開く「公共の世界」が何によって成り立っているのか、そもそも「政治」とは何であるのかは、すぐれて哲学的な問いでもある。

政治的な公共的世界の可能性を考察することは、哲学が陥っている、あるいは陥りやすい観想的な主観主義や独善主義を克服し、寛やかな視点を取り戻し、言葉と行為にそれ本来の生命と力を与えかえすことにつながるはずである。それと同時に、このことよって失われつつある社会的連帯性、あるいは人類の共同性に対して何がしかの光を投ずることができるかもしれないのである。

こうした意味で現代の政治哲学者ハンナ・アーレントの考察は、政治や共同体の本来の意味が何であるのか、言葉と行為は人間の条件としてどれほど偉大な価

値をもつかという基礎的な、忘れられつつある問いに大いに寄与している。のみならず、彼女の独創的な解釈はアリストテレスやカントの思想、それだけでなくフッサールやハイデガーの現象学に新たな可能性を開くものとしても、実に貴重な知見を数多く含んでいる。本小論では、彼女の著のひとつ『精神の生活』、及びそのの付録として収められている「判断力」論文を手がかりとして、政治的生 (Bios Politikos) を必然とする人間の存在と人間の社会がいかなるものであるかを少しでも明らかにすることに努めたいと思う。

一、ギリシア的精神としてのアゴーンとロゴクラシー

H・アーレントは言っている、政治の本質は普通信ぜられているように、「権力」、「利害」、「支配」などにあるのではない。そのような通俗的理解は誤りであり、むしろ「言語、論議、熟慮そして判断」という点にこそ彼女は、政治の本質をみよとしていっている。まさにこの点にこそ、西欧文化の源流となった批判的―論証的精神を生み出したものに深くかわる何かが認められるように思われる。

それは、理性のみを普遍的基準とみなす思想上の革新がつねに依拠し、そこからみよからの真理性と普遍性とを汲み取ってくるロゴスにおいて他には考えられないであろう。「初めにロゴスありき。ロゴスは神なりき」(ἐν ἀρχῇ τοῦ λόγου θεὸς ἦν ὁ λόγος.) という新約聖書『ヨハネによる福音書』の冒頭に置かれた「ロゴス」の高らかな宣言は、この世を支配する神的秩序が何であるかを語ろうとしているだけでなく、西欧世界とヨーロッパの人間のある「宿命」(Geschick) をすら規定するかのようでもある。

何かを批判し、何かを論証すること、その過程においても結論においても恣意性と偶然性が入りこむのを完全に遮断し、そのゆえに万人に開かれた、有無を言わさぬ説得力を備えたエピステーメー(知)にしあげることは、文字通りロゴスを尽くし、その可能性の全てを歩み抜き、決してロゴス以外のものを權威として立てないことよっている。まさにこのようなロゴスに基づく精神的態度こそが、アーレントがそこに政治の本質を見ようとした、古代ギリシアにおける民主制の創建を可能にしたものであったのではなからうか。

J・ブルクハルトの名著として知られる『ギリシア文化史』は、周知のように、古代ギリシアの行動と思考を貫くものとして「アゴーン」(競争) という概念を提唱している。下村寅太郎によれば、ギリシア人における全生活の「競技化」

——オリンピアの競技場、歌唱や美術作品の優勝争い、機知の比べあい、ポリス内、ポリス同士の勢力争い、各種の試合、訴訟、哲学の対話的議論、数学の論証、弁論術等々における——こそ、ブルクハルトのギリシア解釈の独創であり、これより以後、彼の提唱した「競技」なる概念は、ギリシア文化の一大特徴として定着するに至った、とされる。

詩的靈感をギリシアに求めたヘルダーリンは、かつてギリシアを「競技者のな眼をもつ若者の国」と呼んだが、この競技者精神は他者と平等なしかたで競いあいつつ、自己の卓越を示さんとする情熱の横溢に支えられている。ギリシア人は、古代社会に広く認められる種族的カースト制による生き方から解放され、仲間と対等に不断にアゴーンを行なったのであり、とりわけ哲学や諸学、政治の領域にあっては、非ロゴスのな、あるいは反ロゴスのな安直な支えに拠ることをみずから禁じて、どこまでもロゴスに依拠した自律の道を進むことを選んだのであった。「なすべきことの実行へ進む前に、予めむしろ言論を通じて教えられないことを、障害とみなす」と演説したペリクレスの言葉は、ギリシア人にとってロゴスのもつ意味の大きさがいかに程であるかを雄弁に物語っている。

ギリシア人の全生活を貫くものとなったアゴーンとロゴスの生が、おそらくは個人の発達、確立に果たした役割りには決定的なものがあつたであろう。平均性と画一性（現代社会に特徴的である）に安住することを潔しとせず、かえって異例と例外を求めてのアゴーンや、圧倒的な説得力を有し、華麗で多彩な言語技術を駆使したロゴスによる挑戦が、どれほど人間を個性的にし、ポリスを光輝あるものとしていったことであろうか。

このようにギリシア社会に普及したアゴーンが成立するためには、当然競いあう者の間に平等の関係が樹立されていなければならぬであろう。平等に基づく競技がギリシア人の全生活に浸透していったことの意義は測りしれない。ロゴスもまたアゴーン化の道を進むことになったのであり、ロゴスのアゴーン化は、ロゴスの秘教化を許さず、万人に開かれた、他者の批判をいつでも受け入れることを義務づけられ、かえってそのためロゴスは一層高度化され精緻なものとなっていったのである。

思うに哲学が発生したのも、思索に適した、たとえば静かな森の中などからではなかった。それは反対に、市民が行き交い、議論を交わしあつた広場であるアゴラ（アゴーンの類縁語である）で誕生したのである。あの哲人ソクラテスは、人里離れたどこかに出没していたのではなく、広場で普通の市民たちと徹底した

問答を行ったのであり、このことはプラトン対話篇の光彩ある叙述に描かれているとおりである。

哲学は、アゴラにおけるダイアレクティケー（問答法、弁証論）の土壌から生まれたという歴史的出自は注目してよい。市民の広場であるアゴラを舞台としてこのような哲学的弁証法が確立されていったということは、そこで展開されたロゴスとロゴスのに基づく合理性が対話的・公共的性格をもつことを示唆している。ロゴスのアゴーン化に伴って登場したいわゆるソフィスト達の弁論術は、アゴラの聴衆を前にして公然と行われ、彼らの言論が当時の社会に大きな影響力をふるったことは言うまでもない所であろう。

それだけでなく公理論的数学のような、純理論的な学問もまた同様の事情の下にあつたことを、科学史家の佐々木力は明らかにしている。彼によれば「数学におけるアルケー（原理、始源）についての活発な議論は、政治におけるアルケー（第一人者たる地位、王権）の権威の危機とともに始まった」と推測されるのであり、高度な理論数学は「批判を許容する社会、民主主義的政体の産物」であつたことが明快に論じられている。

それゆえに、王権の解体とそれに伴う貴族階級の台頭、さらには民衆政治の成立という歴史的経緯は、真剣な議論と仮借ない批判的精神から直接生み出された、と言わねばならない。アーレントが政治の最も重要な契機として挙げた、言論、議論、思慮、判断は、ロゴスのな本質そのものであり、それはまたすぐれて人間的な相互主観性に固有なものである。原理上、議論の対象になりえないものはなく、いかなる対象をも批判的に徹底討議にかける（そのさい、対等な人間関係に基づくアゴーンの形式をとって）ことによつて、人間性のしぼしば陥りがちな一面性や独善性を可能な限り除去する機会をもつとき、より広汎に承認されうる合意の合理的形成へと向かうことがはじめて可能となる。

そこには他者の存在するところで、他者の異なった見解や観点をも考慮に入れ、そうすることによつて自己の単なる意見をかえつて、より普遍化し、妥当性の拡張を期待できるという看過できないモメントが含まれていることに気づかされる。換言すれば「他者」の存在への顧慮は、「他者」とのいわばコミュニケーションの可能性を模索することを基軸とするロゴスのダイアローグの具体的実践なのである。

ロゴスはその固有の本質からいって、決してモノローグではなく、ダイアローグである。ロゴスは何らかの言語共同体を地平にもつものとして、本来、対話的

共同体的、相互主観的な性格を有するのである。ロゴスは、他者や異なった視点を排除するばかりでは、孤独なモノログに終始するほかはなく、むしろ他者や異なったものとの開かれたダイアログにおいてこそ、より充実し、より発展できるダイナミズムを発揮する何かなのである。このように考えてよいとすれば、コミュニケーション能力としてのロゴスは、他者と共に生きる公共的領域の存立に不可欠、不可避の、人間の共同体的能力であると言ってもよいであろう。

先述したとおり、哲学や数学の成立の背景としてロゴスのアゴーン化、あるいはアゴーンのプロセスの徹底が指摘できたように、デモクラシー(democracy)の根底には、やはり右のようなロゴスを中心とするいわば「ロゴクラシー」(logocracy)がひそんでいる、と言わねばならぬであろう。単純に言って、ロゴスのあるところのみ、デモクラシーの可能性もある。言いかえれば、公共的な空間が開かれ、他者との共同が可能な場には、ロゴスの絶えざる生成と創出、そして多彩な展開が当然見られるはずなのである。

他者の不在という状況下においては、対話も発話も途絶した、モノログという閉塞した不毛の砂漠がのさばるだけである。対話的なロゴスの活動においてのみ明るみをもつ公共的空間は、このとき再び閉ざされた闇へ沈みこんで、モノログの紡ぐ糸は共同性の要件であるコミュニケーションを喪失して、奇怪な形姿となる他はないであろう。

したがって民主主義とは、実はロゴクラシー(言葉主義)なのであり、ポリスは「純粹に言葉による政体」なのである。アテネというポリス民主制は、彼らの定めたノモスや城壁によって成り立っていただけでなく、むしろそのこと以上に、言葉によってこそ成り立っていただけである。そのようなロゴクラシーをもっともよく示す典型としては、古代ギリシアに隆盛をみたソフィストの弁論術がまさきに念頭に浮かんでこよう。

ソフィストの仕事はプラトンの作品において、やや一面的に捉えられるという、誤解を与えかねない要素もあつたものの、代表的なソフィストの一人であるゴルギアスの弟子イソクラテスを經由して、弁論術はローマ世界に伝えられ、それは長らく西欧における人文的教養の精華とされていったのである。このことは自由七科(リベラル・アーツ)とよばれるものの中に、修辞学、文法学が含まれていることから容易にうかがえるであろう。

ソフィスト達による言葉の多様なあり方についての探究、華麗な修辞や説得の技術の洗練に「言葉と理性の異様なまでの重視」を指摘することもできよう。こ

のレトリックこそ、ヨーロッパの教育と教養の基盤であり、それどころか「二千年五百年にわたってヨーロッパ文明を支配した」(ロラン・バルト)ものなのである。人は言葉のもつ「魔法のような動き」に目をみはらせられることがしばしばある。言葉は人に働きかけ説得し、人を動かし、それだけでなく社会を動かし、国を導く力をすらもつ。この意味において、レトリックそれ自身がすでに政治なのである。ソフィスト達は言葉のもつ大いなる秘密に気づいていたのである。このように暴力や強制力の助けを借りることなしに、言葉は言葉だけで、しばしば偉大なものを達成することさえできるのである。

「人はパンのみにて生きるにあらず、神のみことばによりてもしかり」というイエスの発したあの言葉は、聖書の脈絡をはなれて、小論の当面の関心に引きあてても、首肯されるものを持っている。というのも人は、たしかに言葉によって生きており、現実も事実もそれだけでは何も意味せず、言葉によって表現されてはじめて、われわれに対して意義づけられるのであり、全ては言葉を通して知り、言葉を通して考える他ないからである。言葉に表現しえないものは、言葉を用いて光をあてられるまでは、およそ理解され伝達されるものの外部に放置されざるをえないのである。

歴史上出現した種々のイデオロギーは、言葉の意味産出機能によって織り合わされた織物であり、まさに言葉を材料として製作された言語作品である。イデオロギーのもつ魔法のような力は、革命の成就に貢献し、あるいは挫折を経験させ、はた又、夢と思われていたものを実現するかと思えば、人間の希望と愛を絶滅する準備させたのである。このように、言葉によるイデオロギーが、人間とその社会のいわば生殺与奪の権利を手中に持ってきたという歴史的事実に照らしてみても、言葉は人間の社会生活の核心を形づくっている。デモクラシーの土台を支えるロゴクラシーは、社会的動物たる人間にとって最も有益かつ実践的な技術能力としてのレトリックにおいて一挙に花開いたのである。

二、前学問的ドクサの復権

これまで、古代ギリシアにおけるデモクラシーが、哲学や他の諸学同様、アゴーンとロゴクラシーを基礎として生み出されていったことを中心に論述をすすめてきた。以下においては、デモクラシーという政治的共同体が出現するに至ったその背景を、現象学的な視点から改めて考察してみることにした。

ポリスがデモクラシーへ移行するそのプロセスにおいて、さしあたり重要なことは、そこに「共通のもの」、「共同的なもの」としての一なる世界が開かれたという点である。このためには、単なるドクサ（意見、信念）に対する批判を行ない、ドクサを突破するラディカルな、全く新しい認識を手中にする必要がある。

エピステーメー（学知、理論的知識）の反対概念としてのドクサとは何かと言えば、それは *dokei moi* (*Es scheint mir...*: It seems to me... 私には...に思われる) という素朴な態度のことである。それはまさに、個人的でかつ特殊な利害を代表する意見であり、しばしば誤りを多く含んだ臆見でもある。しかるに共同的な一つの世界が可能となるには、何と云っても、単なる主観的・相対的のみなされる、このようなドクサを乗り越えることが前提となる。

現象学的に分析してみると、このようなドクサは、そのつどの特殊な地平に囚われて制限されている自然的態度 (*die natürliche Einstellung*) に固有のものである。日常的な自然的態度は、いわば万人の無意識の哲学として、素朴な客観性と自明性の上に安らっている。換言すれば、主観性の忘却のもとに、私との一切の関係を離れて、「世界がそこにある」こと、つまり即自存在の不可疑の信念から成り立っている。

それが素朴かつ無自覚であるとして批判されるのは、このような即自存在なるものがそもそもどのようにして自らに与えられるのかという問いに全く無頓着だからである。それは、自然的態度が現出する対象のとりことなっているからであり、そのために対象の与えられた方という現出そのものの次元は、いつでも素通りされる他ない運命にあるからである。このような「与えられ方」を飛びこえて、直接、無媒介に対象のもとにあるという自然な意識は、「与えられ方」というきわめて根源的な開示性を隠蔽するのである。逆にいえば、そのような隠蔽が生じていることが、対象があるがままの姿において現出し、滞りなく日常が進行していくための必要条件ですらある、とも言えるわけである。

このことは、「与えられ方」そのものに固有の動態であるパースペクティヴ性に対して盲目となることを意味すると同時に、それは一つの共通の世界への通路を遮断してしまうであろう。なぜと云うに、自然的態度は、主観的・相対的遠近法に束縛されていることに気づかないから、自己の見解を相対化し、他者に開かれ、他者と共有化する可能性を断たれているからである。

自然的な日常意識は、特殊で一面的なドクサの段階に固執したまま、それを断

念する必要性も感じないゆえ、自己の制限されたパースペクティヴの打破によって「共通の、公共的なもの」の領域を形成する資格を、いまだ奪われている。このようなドクサを虚偽と迷妄の道として退け、それに代わって、哲学的なエピステーメーを真なるものへの唯一の道として対置したのが、プラトンの哲学であった。ドケイ・モイというドクサに対する徹底的な批判によって、制限された個別の諸地平が克服されるべきであり、それを通してはじめて一なる世界へ超越する真なる知としてのエピステーメーが与えられるはずなのである。

自然的な態度においてはどこまでも非主題的にとどまる「与えられ方」とそれを通して開かれてくる「一なる世界」の開示は、自然的な意識（ドクサ）の先入見から解放された哲学的思考（エピステーメー）によってのみ達成されるというわけである。ところが、バルメニデス、ヘラクレイトスを経由しプラトンに発する、このようなドクサの評価と位置づけに対して、現代思想ではむしろ逆に、たとえばハイデガーの主張する理解の「先一構造」(Vor-Struktur)、フッサールの提唱する「生活世界」(Lebenswelt)、後期ヴァイトゲンシュタインのキーワードとなった「言語ゲーム」(Sprachspiel)、或いは初期西田幾多郎の「純粹経験論」(pure experience) などに見られるように、妥当性の根拠をかえって積極的に前学問的な、日常的なドクサの中に見出そうとするのが、大きな課題とさえなっている。

この点について、K・ヘルトは、自然的態度の態度変更の動機づけに関して、フッサールは数十年にわたる研究草稿の中で、この態度変化を促すものが何かを問うたが、満足のいく答えはついに得られなかった、と結論している¹²。この問題を解決する手だては、自然的態度（ドクサ）とそれを克服する哲学的態度（エピステーメー）との対比において、前者から後者への移行の可能性をさぐるときに、ドクサそれ自身の中にこの移行をもたらす要素が内含されている、と想定する場合にしか与えられぬであろう。

そうだとすると、個別の諸地平、フッサールの用語でいうと「特殊諸世界」(Sonderwelten) を、一つの共通世界へ向けて超出していく可能性が、自然的態度それ自身の内部に萌芽として孕まれている、と考えざるをえない。一つの共通世界に対して開かれているある態度こそエピステーメーにふさわしいものであるが、一方ではそのような意味でのエピステーメーとはいえないにしても、他方においてエピステーメーとは異なっただけで、特殊諸世界の制限を超えて、一つの共通世界に身を開いている、そのようなドクサの一形態がなければならぬこ

とになろう。はたしてそのようなドクサが都合よくどこかにあると言えるだろうか、と怪訝に思われもするところではある。しかしまさに、古代ギリシアにおけるポリスのデモクラシーへの発展段階を考察すれば、この問いにふさわしい答えの糸口が発見されるのである。

それはポリスのデモクラシーへの移行において、デモクラシーというポリスの「共同的、共通のもの」が一般の市民大衆の間に開かれていた、という歴史的事実をもって答えられるのである。すなわち、そのような万人の共同的なものとしてのポリスにおいて、民衆のドケイ・モイの個別的諸地平を克服する公共的空間が、デモクラシーの制度化を伴って成立していたことが、その何よりの証となる。

先述したアゴンとロゴクラシーを支えにして、いいかえれば、まさに全生活の徹底的な競技化とロゴス化とを通じて、万人が近づきうる、万人に開かれた一つの共通世界、すなわち公共的な政治的空間が創出されたのである。万人に開かれた公共的領域は、現象学的な態度変更である、ドケイ・モイという自分だけにしか通用しない狭い視野に囚われたドクサからの解放によってのみはじめて打開された現出の空間であると、みることができよう。

自然的態度から解放されたドクサは、もはや一面的で単に私的でしかないドケイ・モイを乗り越えて、他者とのコミュニケーションに開かれた「公共的判断」という性格を帯びることになる。なぜかという、それはアゴンとロゴス化を経験して表明された言論であるがゆえに、自分自身及び共同する他者に対して責任を負うからであり、そのように自他に責任が発生する言論であるがゆえに、公共性が発生するからである。

以上の検討からどんなことがわかったかという、ドケイ・モイという自然的態度は、前学問的なしかたではあるものの、一つの共同の世界に何らかすでに開かれており、このような類のドクサは、もともとアリストテレスによって発見されてプロネーシス (phronesis) と呼ばれたものに他ならぬということである。アリストテレスは、『ニコマコス倫理学』の中でもとりわけ重視されている第6巻で、プロネーシスをエピステーメーに對置して比較考量している。彼によって、ドクサに対する従来の低評価に對するドクサ復権の道が開通したのである。アリストテレスはプロネーシスを提唱することによって、従来否定的にのみ捉えられてきたドケイ・モイそのものに対して、一なる共通の世界へ到達しうる可能性を明確に認めたのである。

プロネーシスは、ドクサとエピステーメーの中間形態として、したがって技術知や理論知というエピステーメーの形式こそもないもの、おおよその場合に、おおかたの人に承認されうるような具体的な実践知、或いは適切な判断力のことには他ならない。それゆえにプロネーシスにあつては、知は行為に適切に結びつけられていなければならない、その具体的実践において公共的な妥当性が認められるのである。

三、Bios Politicosを支えるものとしての判断力

プロネーシスは、ドイツ語ではKlugheitと翻訳されるが、この言葉の普通の意味である伶俐、思慮、あるいは抜け目のない機会便乗主義といったことではなく、適切な政治的能力のことが理解されるべきである。ギリシア人のものでデモクラシーの政治的共同生活が成立したということは、世界がまずもって政治のための空間として経験されたということの意味している。プロネーシスは、まさにこのような世界における公共的な意見の形成に関わるものとして、とりわけ政治的・共同体的なのである。

ところで、政治的な空間として開かれた世界の要件をなすものは何であろうか。近代の政治思想によれば、すべての人間は本来、平等であり自由である、とされる。しかし生まれつき人間がそうではなく、むしろ何かの政治的共同体のメンバーとなることによって初めて平等や自由といった基本的諸権利を獲得するのである。

いわゆる全体主義のテロルが人権の抑圧や弾圧を行なうのは、このような人間の共同体の破壊の結果なのである。人間は自己の所属する共同体を奪われることによって、あらゆる権利を失うに至るのである。アーレントがいみじくも語っているとおり、「ギリシアのポリスにおける平等ないし同権は、ポリスの属性であつて、人間の属性ではなかつた。人間は、その平等を、市民になることによって獲得したのであつて、誕生することによって獲得したのではないのである」¹³⁾。

アーレントの教えるように、平等や自由は公共的にのみ存在しうる何かであり、個人に所属する属性とはみなしえない。平等や自由というのは、人為的な制度による保護と保証なければ、いとも容易に雲散霧消しかねない脆弱なものなのである。ギリシア民主制を特徴づけるあのロゴクラシーは、このような保証の上にはじめて生まれえた自由や平等を背景にして、市民相互の意見交換と合意形成に

向かって発動されていたのである。

ところで、こうしたロゴクラシーが貫徹する政治的・公共的領域において、人々の間に「言葉と行為」が共有されるためには、前述したとおり、ドケイ・モイの部分的な地平が克服されていることが必要であった。しかし各自のドクサの一面性への気づきが生じるためには、自己が他者に開かれた共同の生を営む者として、他者によるロゴスの吟味、検討を経る必要がある。既に明らかにしたとおり、自然的態度の乗り越えと共に特殊世界を突破して、一つの共同的世界にあづかることができるようになるのであるから、複数の他者の多様な意見との競合（アゴーン）が、自己の利害関心のみ腐心するだけのドクサからの解放を人間に約束するのである。そのことがまたかえって、単なるドクサにすぎなかったものを、責任ある判断へと仕あげることになるのである。そのとき、そのつどの具体的な状況にもっともよく適合した、ブルーデンシヤルな意見というべきものが形づくられたと言えるわけである。

ヘルトの見解によれば、「公共性は自分自身に囚われていることからのドクサの解放ともいべき一つの開けに基づく」¹⁴。したがって、ドケイ・モイが公共的な判断という資格をもとうとすれば、反対する意見や対立する見方をどう顧慮したのかが問われるのである。

まさにこの点に関して、特にアーレントの kant 解釈の要ともなった「反省的判断力」が決定的に重要な意味をもってくるように思われる。彼女は、kant 『判断力批判』の第I部、第40節「一種のセンス・コムニス・センス communis」としての趣味について」にとりわけ注目している。kant は反省的判断力の分析に際して、明らかにアリストテレスの「共通感覚」、すなわち政治的・共同体的なプロネーシスを、或いは健全な人間悟性としての常識（コモン・センス）を援用している。判断に避けがたくつきまとう主観的私的制約に気づき、それを突破可能にするものこそ、共通感覚的な判断能力なのである。

もちろん、kant がここで直接問題にしているのは美的判断、とりわけ趣味判断の問題であって、政治的判断ではない。つまり、アーレントは kant の美的判断を政治的能力として転写しているのである。果たしてそれが許されるだろうか。たしかに、あるものを美しいと言明する趣味判断は、単に私的な感情を吐露しただけの、個人的な嗜好の問題には尽きないものがある。そこには単なる主観的な恣意性を超えた要素が認められるはずである。R・ベイナーも指摘しているとおり¹⁵、美的判断と政治的判断との間には、実はある種の類似性があり、評価されるべ

き判断対象（「それは美しい」、「それは不適切である」等々）に関わるある種の普遍性をもった価値判断として近似するのである。他のようにありえないものにおいて成立する理論的エビステメーは、客観的な普遍妥当性という認識理想を手にしうるでもあろうが、美的なものや政治的なものにかかわる判断は、ゆるやかな範囲内で大方の妥当性が認められれば、それで満足するしかないのである。それはまた政治的判断に固有の特徴でもあろう。

kant はこの第40節で、健全な人間悟性の格率として次の三点を挙示している。1. みずから考えること（selbstdenken）、2. あらゆる他者の立場で考えること（an der Stelle jedes anderen denken）、3. いつでも自分自身と一致して考えること（jederzeit mit sich selbst einstimmig denken）の三つである。第一のものは偏見にとらわれないこと、第二は拡張された考え方、第三は首尾一貫した考え方を表している。

第一の迷信からの脱却は啓蒙として、第二の偏狭・固陋から普遍的見地への脱皮は視野の拡大として、これら前二者の成功によってかろうじて第三の無矛盾であることが達成されうる、と kant は述べている。重要なのは第三の拡張された考え方の格率（Maxime der erweiterten Denkungsart）である。視野の拡大は、ひとりよがりや歪曲に陥りやすいドクサを、社会的・共同体的な判断、いいかえれば、共通感覚に根ざしたプロネーシスに高める大切な契機となるからである。

人間は、他者と共に一つの共通世界の中で生を送っており、共通感覚の調和的適合の働きによって、はじめて自分をそのような世界の中へ定位させることが可能となる。われわれは何かについて判断を下すことで何をしようとしているのかという、同じ世界の中でその同じ何かにかかわっている他者へ訴えかけて、その承認を得んと試みているのである。それは、自分の判断が、他者もまた共有している同じ判断であることを期待して表明されているがゆえに、そのような判断はもともと対話を前提に形成されており、他者との共同に基づく相互主観的な特徴をもつ、と言つてよいであろう。

共通感覚的な土台の上で判断を行なうとき、そこには他者の地平が共に意識されているがゆえに、そのような判断は再帰的な関係に入っていることになる。こうした再帰的な自己関係のあり方は、伝統的には「反省」と呼ばれてきたがゆえに、kant は反省的判断力という名称をもつばら使っている。それは、包摂されるべき普遍者をあらかじめ欠いているために、与えられた特殊のために普遍を改め

て見出してゆかねばならない判断とされる。これに対するに、規定的判断力の方は、与えられたものを包摂すべき普遍者は与えられていて、その適用、運用だけしか問題とならない。美的判断や政治的判断は、まさに予め与えられた普遍者を欠くゆえに、個別的な事例に即して、そのつど最適、最善のものが探究されねばならぬ典型である。

このように、最適のものを発見しようとするプロネーシスにおいては何よりも、みずからの判断の妥当性を無制限に要求することを抑制することを学び、それに制限を加えることが求められる。このような要請の必要性が痛感されるのは、他者の眼をもつて自己の立場を点検するときであろう。他者の立場に身を置くことは、「あたかも私がここではなく、あそこにいる他者である」と仮定すると、そこからここはどう見えるか」というしかたでみずからの想像力を発揮することである。自他の立場の想像上の交換は一種のロール・プレイングであり、視点の変更は視野の拡張を伴って、みずからの考え方の修正や転換を現実に迫るものとなるであろう。

カントが指摘している「他人の立場に自分を置き入れてみる」というのは、予想される対立を予め回避するためでも、他人に最初から同調するためでも、或いはまた多数派に与しようとするためでもなく、むしろそれは、他者の現実的な意見ではなく、可能な見解は自分の考えの中にあらかじめ全て織りこみ済みであるので、自分の見解は採りあげられて然るべきだという要求を掲げるためなのである。いいかえれば、それは公平さと賢明さとを備えた判断（プロネーシス）であるとの自己主張であり、そこから発する権利要求なのである。

したがって、想像力と結びついた判断力は、私と全く対等であり、自由に意見を形成しうる他者を顧慮するという意味で、コミュニケーションにふさわしい能力である、といえるであろう。これに対し純粋理性や実践理性は、そのような他者をさしあたり念頭に置く必要のないひとつのモノローグ的な論理的体系であり、公共的な領域や自然から独立に、理性の自律、或いは経験に由来しない超越論的論理のみを基軸として首尾一貫して展開しうる能力である。判断力が共同体にかかわる政治的な能力とされる所以である。

共通感覚に基礎を置く判断力は、まさに一つの共通世界へわれわれを適合させ、「我々に世界の本性を露呈させ、共通世界内での我々の位置を知ることが可能にする」⁽¹⁶⁾のである。ものの味わい、そこに生ずる趣味は、そのものもつある本質的なあり方、その全体的なニュアンスを直截につかみとつてくるときの人間の

経験をあらわしている。そこに働くのが人間の五感を統合する共通感覚であり、それによって選択や強調、補正などの加工を通じて首尾一貫した「変換」⁽¹⁷⁾が恒定的、安定的に遂行されるのである。こうしてものの「実像」が生み出され、一つの「現実」が産出されることになる。この点については五官の形成のなかに「全世界史の労作」（『経済学・哲学草稿』）の痕跡を読み取ったマルクスの見解を付け加えてもよい。人間的な感性はそれ自身、文化的・社会的な刻印を帯びているのである。

このようにして、共通感覚による統合が恒常的なしかたで秩序ある一貫した変換に成功するとき、そこにはじめて万人に開かれた共同のな生を可能にする、一つの公共的な世界が現出する。したがって、このような共通感覚に基づく反省的判断力の適切な使用の問題は、共通感覚的な五感の統合のしかたに、つまりフツサールの言えば、相互主観的な統覚の能作に関わってくる。フツサールがフツセリアーナXV巻「相互主観性の現象学のために」で扱った故郷世界と異他世界の対比の論点の一つは、この問題と密接に関連する正常性―異常性の基準問題であった。⁽¹⁸⁾

この正常性―異常性の問題は、共通感覚的に統制された反省的判断力の妥当性―非妥当性、或いはその使用の適切―不適切に関連してくるように思われる。いわゆる正常な統覚体系は、先述の一貫した変換の枠内に現れてくるものとして慣れ親しんだ類型性に即して示しうる。こうした類型に収容しきれないものとして排除されるのが、何か異質のもの、異常なものというネガティブな刻印を押しつけられるものなのである。こうした異他的なものの経験をを通して、故郷世界としての生活世界の有限性をはじめ意識されることになろう。同時に、このような正常性の規範的類型性が、幾世代にも遡ることのできる「世代発生」に基づく習慣として定着したものであることが露呈されるのであり、その意味でその体系は歴史的世界に属するものであることが明らかになる。正常性の体系がこのように有限的で歴史的であるということは、反省的判断力を統制する共通感覚もまた同様である、と言わねばならぬであろう。この意味においてカントが「狂気の唯一の一般的な特徴は、センスス・コムムニス⁽¹⁹⁾の喪失である」（『人間学』、第46節）と述べているのは甚だ興味深いものがある。

あとがき

はじめに、古代ギリシアにおける「原創設」としての哲学やその他の個別科学、さらにデモクラシーをとりあげ、アゴーンとロゴクラシーという概念を中心にしてその歴史的な画期の意味を明らかにしようとした。その論究の中で西欧世界のロゴス偏重とでもいべきあり方が浮かびあがった。しかしこの問題に現象学的な分析をほどこしてみると、デモクラシーによる公共的世界の成立には、単なるドクサでもなければ、エピステーメでもない、独自のプロネーシスという実践能力がかかわっていることが指摘された。アリストテレスによつてすでに把握されていたこのプロネーシスは、共通感覚の問題と結びつくと共に、カントの反省的判断力が依拠している当のものであることがわかった。カントが考え、アーレントが明確にしてみせたように、美的判断も、また政治的判断も一つの社会がおよそ共有している価値の体系として考察可能であることが論じられた。

政治的公共世界の問題をめぐって、右に要約したように、とくにプロネーシスー共通感覚ー判断力の三つが重要なモメントであることが明らかになった。これら三者の関係を一層明確にするためには、哲学、政治学、倫理学が互いに交叉しあうトポスをまず確定する必要がある。ヘルトにしたがって政治的なものという現象が現象学にとって「中心的な体系的意義」をもつとするなら、哲学はまさに公共的な世界に立ちかえって、そこから省察を始めねばならない。今、もつとも必要とされているのは人類のプロネーシスであろうから。

注

- (1) I・カント「判断力批判」(『カント全集』、第八巻、一九七頁、理想社) 訳を一部変更したことを予めお断わりする。
- (2) 拙稿「政治的公共世界についての哲学的考察」(本校「研究報告」、第43号)を参照。
- (3) 古代ギリシアの文化史、社会史については多くの定評ある書物がある。ここでは、最新の成果を踏まえ、多くの知見に富む、簡潔で精彩ある叙述の佐々木力「科学論入門」(岩波書店)を参照。
- (4) 哲学や個別科学の原創設と世界最初の民主制の確立が決して偶然ではないことに関しては、K・ヘルトの論文「フッサールとギリシア人」

(「現象学の最前線」、晃洋書房、所収)を参照。

- (5) ロナルド・ベイナー「政治的判断力」(浜田義文監訳、法政大学出版局) ix頁以下を参照。
- (6) 下村寅太郎「ブルクハルト研究」(下村寅太郎著作集)第九巻、みすず書房)を参照。
- (7) M・ハイデガー「ヘルダーリンの詩作の解明」(「ハイデッガー全集」第四巻、創文社)、二二七頁を参照。
- (8) 佐々木、前掲書、特に四二一五〇頁を参照。近代の自然科学(ガリレオ)と政治哲学(マキアヴェッリ)の類似性の指摘も興味深い。
- (9) 下河辺美知子「国民国家のヴォイス・トレイニング」(「現代思想」、一九九七年、六月号、青土社所収)、二二頁以下参照。彼女によれば、革命アメリカの目ざした政治体制をロゴクラシー(ことば主義)と呼んだのは、ワシントン・アーヴィングなる作家である。アメリカ人は気づいていないが、彼らの政治は実は「純粹に言語による政治」であるとし、イデオロギーを産出し、共同体を作り出す言説の意味作用が注目されている。「アメリカ合衆国は言語によって成り立っている」というが、それはどの共同体についても或る程度いえることであろう。言葉と言葉が作り出す物語、その共有——こういった点についてはむしろアテネ民主制がそのよりよい典型となろう。
- (10) イソクラテスの果たした役割りについては、中村雄二郎「術語集」(岩波書店)、一九一頁以下参照。ヨーロッパの大学教育においては、いわゆる一般教養(リベラル・アーツ)として、文学・修辭学・論理学の三学と算術・幾何学・天文学・音楽の四科が中心であった。西欧の歴史ではこのリベラル・アーツが本流で、専門教育は一種の職業教育とされてきた(それゆえ、グラデュエイト・スクールに進んで、ロースクール法学校、メディカルスクール医学校に入るわけである)。日本の大学改革における一般教養の廃止が「日本社会の知的崩壊」、「日本の知力の総和の低下」をきたすとの警告を、みずから大学教育にかかわる立花隆が発している。「芸芸春秋」、一九九七年、九月号所収の論文「知的亡国論」(一七七一—一七三二頁)を参照。
- (11) 坂口ふみ「始源へ帰る」(「思想」、一九九七年、二月号)一一三頁を参照。

- (12) K・ヘルト、前掲書、第VI論文「ドクサの二義性と近代法治国家の実現」、第VII論文「カール・マルクスと哲学の最古の理念」を参照。
- (13) H・アーレント『革命について』（志水速雄訳、ちくま学芸文庫）四一頁以下を参照。
- (14) K・ヘルト、前掲書、一八七頁。
- (15) R・ペイナー、前掲書、二二七頁。
- (16) 同右、二二頁。
- (17) 鷲田清一『分散する理性』（勁草書房）、七一頁、一八六頁を参照。また、拙稿「変換としての意味空間」（本校『研究報告』、第36号）を参照されたい。「一貫した変形」はまた「世界の現出が同時にその変換である」という事態においてある。
- (18) 正常性―異常性の問題については、K・ヘルト、前掲書、第X論文「故郷世界、異郷世界、唯一の世界」を参照。
- (19) 西欧世界とは全く反対にわが国は「初めにコトバなし」であると山本七平は言う。人のあまり言っていないことであるが旧日本軍が同胞に対して犯した最大の罪悪は、「コトバを奪った」ことにある。この指摘は戦前だけでなく、戦後日本にも尚妥当している。この点については、稲垣武「怒りを抑えし者―評伝山本七平」（PHP研究所）、一九三頁以下を参照。日本型ファシズムの形態は何かといえ、実に「はじめに言葉なし」を基本形態とするとさえ山本は考えている。同書、三一八頁を参照。
- (20) K・ヘルト、前掲書、一八頁参照。

（平成九年九月二十四日受理）

（宇部工業高等専門学校 社会教室）